

浄土

monthly
JŌDO

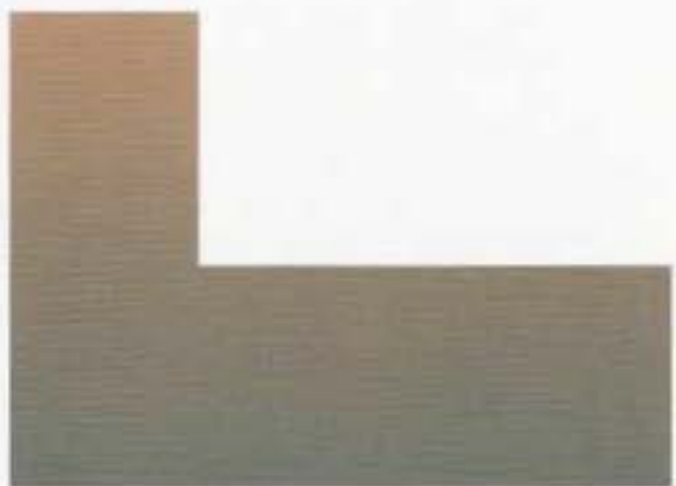
10

October 2007





名利は生死のきずな、
三塗の鉄網にかかる。
称名は往生のつばさ、
九品の蓮台にのぼる。



高階入道西忍に
示されける御詞

浄土

2007/10月号 目次

法然と親鸞(その一)	田島 栄	2
法然上人とその時代 壇の浦へ	石丸晶子	10
表紙の言葉	桜井良夫	17
会いたい人 加藤武さん①	関 容子	18
響流十方	袖山榮輝	26
江戸を歩く 第十回	森 清鑑	30
Jフォーラム		43
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはねっ	かまちよしろう	47
編集後記.....		48
教えと法話.....	生野善應	



表紙題字=中村康隆前浄土門主
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

法然上人鑽仰会

公開講演会

法然と親鸞

脚本家

田島 栄

その
一

私は横浜の漁師町に生まれました。

海がきれいで、毎日のように泳いだり、舟に乗ったり、魚を捕ったりして、楽しく遊びながら育ちました。

ところが小学校三年生のときに、あの太平洋戦争がはじまり、徹底した軍国主義教育でしごきにしごきぬかれたんです。

「天皇陛下のおんため、日本の国のために、大勢の敵を殺し、にっこり笑って立派に死ね」と、人殺しと死ぬことだけを毎日教えこまれました。

人間を愛することとか、生命を大切にすることとか、幸せに生きることなどは、誰も一度も教えてはくれませんでした。

そして敗戦――

私は中学校に入ったんですが、授業へ出るより、くわえ煙草で盛り場をほつつき歩くほうが多くなり、高校生になると、万引グループをおどかして、その上前をはねた金で、焼酎をがぶ飲みしては喧嘩をしてまわったものですから、先生方に、「お前が来ると事件がたえない、もう学校には来るな。授業を休めば出席にしてやるが、出てきたら欠席にするぞ」なんていわれました。

なぜ、そんなになったかという、今のつっぱりとは原因が違いました。

つい昨日まで、「日本は神の国だ。アメリカ、イギリスは鬼畜生だ。奴らを殺せ、殺せ、この戦争は正義と平和のための聖戦だ」と教えてきたのに、

戦争に負けると、がらりと変って、「これからはすべてアメリカに学べ。あの戦争はみんな日本が悪かった。一億国民総ざんげしろ」というんです。

「ふざけるな、冗談じゃない……」

私は人間が信じられなくなりました。

新聞も、ラジオも、活字も何もかも信じられなくなりました。

自分自身も信じられない。生きているのが嫌になる日もありました。

だって、戦後わたしたちは、アメリカが、広島・長崎に原爆を落したことを知りました。

この世界に真実はあるのか……、被爆者の写真には胸をひきさかれる思いでした。

私は今もこの心の傷をひきずったまま演劇の脚本を書いています。

それと、もう一つ理由がありました。

貧しかったんです。

敗戦後の横浜の街は、空襲のために一面の焼野原で、市民の大部分が飢えに苦しんでいました。

焼あとのあちこちを戦災孤児がさまよっていました。

そのうえ失業者があふれ、仕事もなかったんです。今のイラクのような状況です。

だから、勉強よりもまず食うことが先でした。

あの、テレビで大当りした『おしん』というドラマで、“大根めし”が日本の農村の貧しさの象徴として有名になりましたが、あの頃、僕たちの食った物は、とてもあんな生やさしいものではありません。

お湯の中に大根の葉っぱや、米粒がばらばらっと浮いているだけの雑炊や、しょう油も無いので塩味のすいとんや、かぼちゃやさつま芋、それに畠の肥料にする豆かすなどが主食でした。

コッペパン一個で二日間食いつないだこともありますし、おおみそかの晩に、自分が寝ている布団をかついで質屋へ持って行って、僅かな金を借りて正月を迎えたり……。米軍の残飯を貰って食ったり、道に捨てられた煙草の吸がらを拾って、巻きなおして、闇市で売ったりしたこともあります。

みんな狼のように眼をギラギラさせて、生きることに関心一杯だったんです。そういう中で、仲よしの友だちが盗みや喧嘩で警察へしょっぱかれたり、恋人やガールフレンドが貧しさのために娼婦に身をおとしたりしてゆきました。

今でも、彼女たちの顔を、一人、一人、思い浮かべると、悔しくて涙が出てきます。

そんな状態でしたから、私はまったく勉強ができませんでした。

それでも先生のお情けで、どうにか高校を卒業させてもらって、補欠のそのまた補欠で大学に入ったんですが、教授にすぐに正体を見破られてしまいました。

「君はおそらく試験官のミスでもぐりこんできたんだろうが、そんな学力では何年いたって卒業できっこないから、おやめなさい」ということで、バツサリ首になりました。

中央大学の法学部というところでは。

正確にいうと、中退ではなく除籍です。学歴詐称はいたしません。

それから、横浜の風太郎横丁というドヤ街のようところで半年ほど暮らしました。

そこは桜木町の駅から野毛の商店街に通じる繁華街の裏にありましたが、自由労働者、浮浪者、娼婦、泥棒……みんな世間から白い眼で見られるあぶれ者ばかりが集まった町でした。

朝から泥棒市が立ち、普通の人は昼でも入るのを怖がる無法地帯でした。

ところが、その街の住民みんなが私に親切にしてくれました。

誠意をもってつきあえば、同じ人間同士なんだという態度で語りあえば、絶対に受け入れてくれるんです。

貧しい人というのは、はじめはかたくなに胸をとざしていても、いったん打ち解けてしまえば、みんな心があたたかいんです。

私はこんな青春を送る中で、机の上では決して学ぶことのできない貴重な体験をしました。

その第一は戦争への憎しみです。

戦時中の生活や教育にも、いい面があったみたいなのをいう人がいますが、誰がなんといおうと、戦争でよかったことなんて絶対に一つもありません。

私の弟は、三才の時に栄養失調になった上に、疫痢にかかって死にましたが、食い物さえ与えてやれば助かるのに、それができませんでした。眼の前で見殺しにしたんです。

だから、私の母は八十四才で死ぬまでいい続けていました。

「あの子は戦争に殺されたんだ……」

第二には、「人間はすばらしいものだ」ということを知りました。

自分が貧しく不幸な身の上なのに、よそ者の私を、やさしくあたたかくかばってくれた人たち……。

私は生涯、かれらのことを忘れることができません。

人間の真実の価値というものは、知恵や学問の有る無し、貧富の差、男女の別などとはまったく関係ありません。あの人たちのおかげで、私は人間が好きになりました。

これが、私が演劇の脚本を書くときのすべての作品の原点になっています。

ですから、たとえ時代劇を書いても、人間をバツタバツタと斬り殺すような劇だけは絶対に書きません。いや、書けといわれても、いくら金を積まれようとも、そんなものだけは書けません。

とくに『法然上人劇』を書いてからは、たとえ舞台の上でも人間の命は大切に描かなければいけないという思いを強くしました。

また人の心をむしばむような、歪んだ、とげとげしい芝居もつくりたくありません。

私はこんな道を歩んで来ましたから、二十八年前に前進座で『法然上人劇』の上演が企画されたとき、「この劇だけは、なんとしても私に書かせて下さい」と申しこみました。

なぜなら、日本にはいろいろな宗派を開いた偉いお坊様は何人もいらっしゃいますが、法然上人ほど平和を求め、すべての人びとの幸せを願って生きられた方はほかにはいないと信じたからです。

それでいよいよ本腰を入れて勉強に取り組んだわけですが、仏教関係の書物というのは難しいものですね。

われわれ素人にとっては、ただでさえ読みなれない言葉だらけの上に、仏教書は難しいものだという先入観があるものですから、ますますわからなくなって、二、三頁も読むと頭が痛くなってくる。

その上、生半可の学問や経験を積んでいる人間というものは、自分なりの物の見方考え方を頑固に持っていて、なんでもかんでもそれにあてはめて理解しようとするから始末が悪いんです。

いわば、おのれのはからいをなかなか捨て切れなから正しい理解ができなくなってしまうのです。

私は、考え悩んで途方にくれてしまいました。そのとき眼を開いてくれたのが、法然上人の「百四十五ヶ条問答」です。

「酒を飲むのは罪になるでしょうか？」「本当は飲まないほうがよろしい。しかし、この世のならい」「念仏しているうちに、眠くなつて困るときがあるのだが……」「眼がさめたらまた念仏しなさい」などと、民衆の問いに答えた、とてもわかりやすいお言葉が集められた問答集です。

そうだ、法然上人は貴賤男女誰にでもふさわしい教えを開かれた人だ。学問の深い人にはそのように、初心者には初心者向けに、対する人それぞれにいちばん適した言葉で語りかけた対機説法の名人なのだ。その教えを難しいと思うのは、自分の学び方にあやまりがあるのだ、と気がつきました。

それで反省いたしましたして、劇画や絵本や子供向けの物語や布教用のパンフレットなどから読みはじめ、一般向けの解説書、やや専門的なものと、ゆっくり読み進んでゆきました。わからないことは、宗門の先生方に教えていただきました。

しかし、脚本は机の上だけでは出来ません。法然上人の足跡を訪ね歩き、ゆかりの地に立って、昔のことに思いをこらし、当時のお姿やお言葉を心の中によみがえらせてイメージを深めることが必要でした。

そのために、岡山の誕生寺には三度、嵯峨清凉寺の釈迦堂には五回、叡山の黒谷へは二回、知恩院の丘の上にある御廟には九回お参りしました。

ほかにも劇に出てくる場所には全部行きました。

それから、十日ほど京都の百萬遍知恩寺に泊めていただき、浄土宗の雰囲気の中で劇の構想を練りました。もともと夜になるのを待ちかねて、若い布教師さんたちや時にはお年寄りの方も交えて街へ出て、酒を飲みながら言いたい放題の意見をかわすような毎日でしたが、それも大いに参考になりました。もし知恩寺に泊らなければ、賀茂の河原で難民を上げます法然上人のお姿は浮かんできませんでした。

演劇というものは、登場人物が生き生きと描かれていなければなりません。作者が劇の中の人物に惚れて、大好きにならなければだめなんです。

そして、作者と劇の中の人間が心を通わせ、お互いの間に会話が成立してこないと生きた演劇の脚本は書けないのです。

しかし、相手が偉人や英雄であっても、どうしても好きになれない人物もいますし、尊敬はできてもあまり会いたくない怖い人もいますし、こちらが話しかけても相手にしてくれないような冷たい人もいます。

ところが法然上人は不思議な方です。知れば知るほど会いたくなり、話したくなってくるんです。

御廟に九回も行ったのは「どう書いたらよいのか」迷った時、悩んだ時に、教えを受けに行っただけです。

法然上人という方は、こちらが話しかけさえすれば誰の前にも現われ、なんでも聞いて下さり、答えて下さるような気がするんです。阿弥陀様と同じ存在なんですね。

(つづく)

法然上人 とその時代

シリーズ第四章

壇ノ浦へ

第一回

作

石丸晶子

画
アーサ

前回「一ノ谷」(全7回)のあらすじ

寿永二年(一一八三)七月、義仲の大軍に追われて都落ちした平家は、一端、九州太宰府に赴いたが、程なくそこを追われ、十月、讃岐の屋島に落ち着いた。四国の豪族で平家の重臣阿波民部成能の手配であつた。

屋島で西国の兵力を集結させた平家は、ほどなく、京都帰還の勢いを見せるまでに勢力を盛り返した。そして翌寿永三年二月になると、平家は八万の兵士を率い、範頼・義経率いる源氏の大军五万と対決したのである。

三草山、一ノ谷、生田の森で戦は繰り広げられたが、義経の奇襲によつて、平家は三草山、一ノ谷の戦いに敗れ、さらに大手の戦いであつた生田の森の戦場にも敗れて、一門の人々多数を失つた。

討たれた公達きんだちのなかの主な人々は、清盛の弟忠度ただのり、子息の清房、養子の清定、孫の知章ともあきと師盛もろもり、弟経盛つねもりの子息経正つねまさ、経俊つねとし、敦盛あつもり、そして同じく弟教盛のりもりの子息通盛みちもり、業盛なりもりの合わせで十人。

また子息の重衡しげひらは生け捕りになつた。

その日、討たれた人々には、合戦を前にしてのそれぞれのドラマがあつた。忠度は西に向かつて阿弥陀仏を称えて討たれ、後に源智上人となる赤子智丸あかごともまるの父師盛は、傍系の侍を助けようとして討たれた。敦盛を討った熊谷次郎直実は、悲しみにくれて敦盛の父・経盛に文を送つた。

大手・生田おおて いくた もりの森では、清盛の子息知盛ともりと重衡ひらが、四万の平家方兵士を率いて範頼のりより率いる五万の源氏方と戦っていた。源平いずれに勝負がつくとも見えなかった。

と、そのとき、

「中納言様にご注進」

と喚きつつ、乱れ戦う人煙を蹴散らし掻き分けて、一騎の侍がぴたッと知盛の馬に胴を寄せてきた。

「武蔵の国の住人、児玉党こだまとうの侍にごさる」

はげしく息をはずませながらその侍はいった。「主の命にて、戦場の中、中納言様にご注進申し上げ候」

大太刀おおたちを振り上げたまま、知盛は侍をキツと振り返った。

「一の谷も山の手も平家の軍勢すでに敗れて候。背後の状況を御覧にはなりませぬか」

大音声だいおんじやうで侍はそう言ったかと思うや、さっ

と馬の首を引き返し、人馬が嘶いさなき喚おめく人煙の中に消えていった。

一瞬の出来事であった。

目前の敵との戦いに全神経を集中していた知盛は、はっとして後ろを振り返った。黒煙もうもうと立ち込め、黒煙の隙間々々からは、喚おめき叫びつつ馬上の侍たちが振りかざす源氏の白旗が靡き、槍や太刀を振りかざす源氏の侍の姿が迫っていた。と同時に、彼の目に飛び込んできたのは、平家方四万の軍勢がわつと総崩れになり、散りぢりに四散しようとしている光景であった。

人馬入り乱れる大群衆は、天地を覆う黒煙につつまれ、盛り上がり、うねり、と思うや雲の子を散らしたように散っていった。

それはもう、統率も指揮もあったものではない、ただ恐怖にかられて喚き声をあげ、四散する平家方兵士の姿であった。兵士というより、逃げ惑う烏合の衆の姿であった。

悪夢を見ているのではないか、とは、この

とき知盛を襲った心をいうのであろう。

が、その一瞬、彼は傍らでやはり太刀を振りかざしつつ奮戦している嫡子の知章に呼びかけていた。

「武蔵守、味方は総崩れになったぞ。父とともに海に出よ」

二

それから半時（一時間）ほど後、須磨の浦の漂う船上で、知盛は平家の総帥である兄の宗盛と対面していた。

一門の総力をあげた今回の戦に、宗盛は戦場に出ず、安徳天皇と御母建礼門院とを守護して天皇の御座船に侍していたのである。

この間わずか半時ばかりのことが、現実のこととは思われなかった。身にまとう鎧は波に萎たれ、ぜいぜいと激しい呼吸と動悸で胸も肩も波打っている。

「味方大敗。武蔵守（嫡子知章）にも先立たれました」

叫ぶような大声で知盛は言った。「頼方も討たれました。申し訳れござらぬ」

児玉党の侍からの注進によって、平家の軍勢が総崩れになったことを知った知盛は、知章と侍臣監物太郎頼方の三騎で敵味方入り乱れる中を海に向って落ちていった。と、すぐ後ろを、今しがた注進の侍を使わした源氏方児玉党の侍十騎ほどが、児玉の家紋である軍配団扇を描いた旗を高く差し上げ、大声で喚きつつ知盛たちを追ってきた。

知盛は平家全盛の日々、六年に亘って武蔵守であった。児玉党はそのよしみから、「後ろを見よ」と注進して平家の敗色を知盛に伝えてきたが、よしみによる情けは情け、戦は戦、というわけで知盛が落ちていくと見るや、後を追って来たのである。

頼方は弓の達人であった。馬を走らせつつ、彼は先頭にたって追ってきた児玉党の旗差し（旗持ち）の首を矢で射抜き落とした。しかし、追ってきた児玉党の武者たちは頼方には

100

●

たが、主として、その中、中絶(中絶)の

卷之三

（一）

○ 正井三孝

この論文は、大正10年の論文である。



目もくれず、一目大將軍と分かる出で立ちの知盛一人を、執拗に目がけて追ってくる。

太刀と太刀、槍と槍、太刀と槍が、あたりの人煙と血しぶきのなかに交叉しあった。頼方も弓を捨て、太刀を抜いて知盛を庇い奮戦している。

とその間をつつと縫って、児玉党の一騎が、馬上でむんずと組み合おうと知盛の馬の背に押し並んで来た。

とその時、児玉党の侍が乗る馬と知盛が乗る馬との間に、分け入って来たのは知章の馬である。

侍と知章とは互いにひっ組んで馬からどつと落ち、侍の首を刎ねた知章は首を太刀に刺して高く上げようとした。

が、その瞬間、児玉党の別の侍が駆けつけ、知章の首は刎ねられていた。

頼方は知章を刎ねた侍の体に押し掛かってその首を搔く。

しかし、とその時、頼方の膝は、飛んでき

た児玉党の侍の矢に射抜かれていた。立ち上がる事ができず、頼方は膝を折ったまま討ち死にした……。

三

「武蔵守は我を助けようとして、敵の中に割って入り、敵と組み合いました。わが子のその姿を見ながら、その隙に私は逃げ落ちたのです。引き返すことをせずに」知盛は海水で濡れそぼった鎧の袖を顔にあてて泣いた。

「我ながら、よくよく命は惜しいものだど肝に銘じたことでございます。それにいたしましても、命惜しさにわが子を見殺しにすると
は」

「いやいや」人の良さそうな顔に落ち着きのない、不安げな表情を浮かべて宗盛は言った。「中納言殿はわれら平家にとって大將軍なる御方。中納言殿に万一のことがあったならば、平家はどうなりましょうぞ。武蔵守殿もそれをお知りになるゆえ、父上をお助けになられ

たのに違いありません」

須磨の海に漂う船上を血のにおいを含んだ海風が吹き抜けていった。西も東も海上には平家の大船、小船が波間に漂い、陸地の海岸沿いには、平家方の落ち武者たちを追う源氏の武者たちの姿が、そこここに海上から見張るかせた。

海辺の松林がなぎ倒されているのが見える。生田の森から須磨に続く海岸沿いには、腕を切られ、胴体を切られ、首を切られた戦死者たちの、血に染まった無数の死体が累々、^るとしてゐるに違いなかった。何しろ敵味方十、五万にも及ぶ兵士が駆り出された戦であったのだ。

戦の無残を語るのは何も陸だけではなかった。海上には、戦死者たちの傷ついた死体や鎧が、無数の武具とともに浮きつ沈みつして海流に漂っている。

(つづく)



表紙の言葉

え
桜井良夫

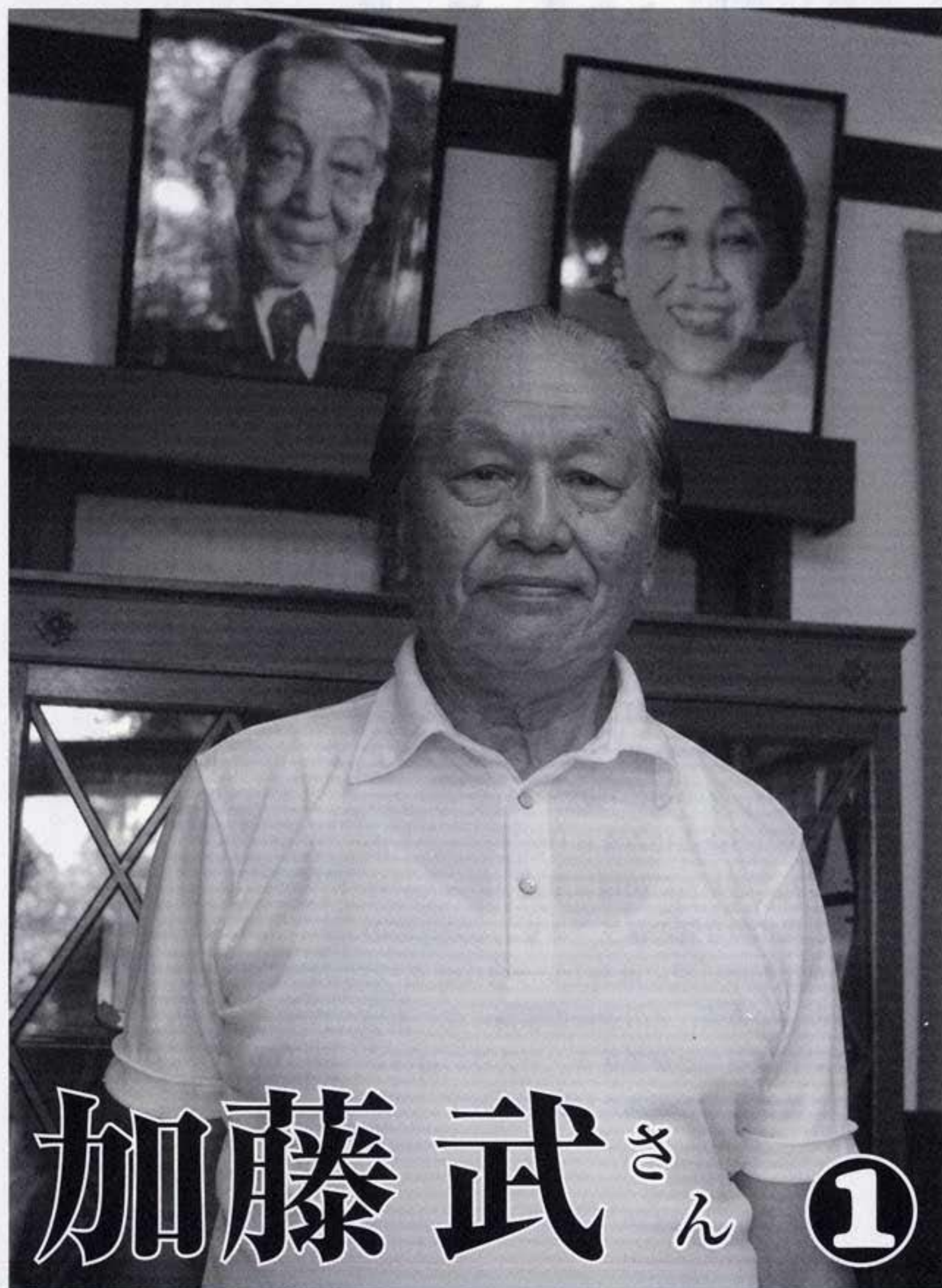
10月

大本山
金戒光明寺

京都市左京区黒谷町、浄土宗大本山金戒光明寺。承安5(1175)年、43歳の法然上人が比叡山を下り、この地の石の上でお念仏をされた時、紫雲が全山にみなぎり光明があたりを照らしたことからこの地に草庵を結んだ。浄土宗、最初の寺院の誕生である。この黒谷の西に京都御所、更に延長上に小倉山があり、春秋の彼岸の頃、その連峰の鞍部に沈む美しい夕陽を観ることができる。一万基の墓碑はそのためほとんど西向きに建てられている。

連載

会いたい人 関 容子



加藤 武^{さん} ①

撮影／タカオカ邦彦

加藤さんが文学座の俳優としてデビューしたのは、昭和二十七年のアトリエ（稽古場）の試演会、『女房大学』だが、私は昭和二十九年の本公演、『探偵物語』の泥棒役から加藤さんを観ている。映画ではカーク・ダグラスが演じた狂気じみた鬼刑事役が芥川比呂志で、その刑事を最後に撃ち殺す眼光鋭い不気味な悪漢役が仲谷昇、加藤さんはその相棒のゲイの役。当時まだゲイというものが今ほど世間にわかられていなかったから、なんだか不思議でおかしな存在として強く印象に残った。考えてみると私にとって文学座は教養と娯楽を兼ねた学校のようなもので、今でも通い続けているのだが、観る度に加藤武という無骨で、やたらに声が大きくて、でもどこかに愛嬌がある俳優に眼が向くようになって行った。中でも『二号』（再演）のキャロウ神父とか、『鹿鳴館』（これも再演）の殺し屋飛田天骨などのユニークな舞台姿はよく憶えている。

その加藤さんは東京築地の生まれで、泰明小学校、麻布中学、早稲田高等学院と進んで、戦時中も築地を離れず、歌舞伎の数々の名舞台を観続けたという、東京っ子の心意気の見本みたいな方なので、いつかは是非お話を伺いたいものと思っていた。それで今回の訪問となったのだが、その場所は信濃町にある文学座のアトリエ。長年通い続けて、おかげで初めてこの二階の応接室に通された。杉村春子、三津田健、加藤道夫などの額の写真が見おろしている。

ほんの少し待って加藤さんが現れる。さっそく、「遅なわりしは、拙者があやまり……」と、歌舞伎口調で挨拶された。途端に加藤さんの著書、『昭和悪友伝』の一節が思い浮かぶ。

戦時中、小学生は集団登下校をさせられたそう、加藤さんはその築地班の班長。その班に下級生の沢村田之助（当時由次郎）さんがいた。本願寺の正門を駆け抜けてくる色白



小学生時代の遠足で豊島園に行き、親子
一緒に徒競走で走る加藤さんとお母さ
ん。「お袋さんは足が速かった」と、今で
も覚えているほどだとか。(写真下)お父
さんはお祭り好きで、とても粋な人だっ
たという



な子役の姿を見つけるなり、加藤さんが六代目菊五郎ばりのしゃがれた口跡で「遅い、遅おい！」とやって『忠臣蔵』喧嘩場の師直を気取る。

「そうすると彼がツツツと小腰をかがめて近づいてきて、遅なわりしは……と判官で斬り返して来る。イヤア嬉しかったね。あの時分、子供はみんな丸坊主でしたけど彼だけは髪をのばしてて、ひ弱でね、そばへ寄るとほんのり白粉の匂いにする。彼が『寺子屋』の菅秀才さいなら、ぼくはさしずめヨダレクリといったところ(笑)。築地から数寄屋橋まで一緒に歩きながら歌舞伎座の絵看板を見て、梨園の御曹司と芝居の噂話をする、というのがものすごく楽しみでした。とにかく彼が『おじさん』と称する人は、十五代目羽左衛門であり、六代目菊五郎であり、七代目幸四郎なんだからね。そういう名優の普段の生活の話を彼がしてくれる。で、昼過ぎに会っても『おはよう』だし、別れるときは『お疲れさま』なんだか

らね(笑)」

加藤さんを演劇の道に引き込む仕掛けがここにも一つ、あったわけだ。

加藤さんは昭和四年五月、築地魚河岸の仲卸業「佃亀新」つくだかめしんの三男として生まれた。

「おとつつあんは叩き上げの魚屋でね、震災前は魚河岸が日本橋にあったんですが、そのころからの魚屋。高等小学校を出るとすぐに小僧奉公に出されて修業した。名は加藤権平ごんぺい。ぼくは親父のこの名前がいやでしたね。友達から、権平が種蒔きや……、ってひやかされるから(笑)。おっかさんの名は徳。本所柳原の生まれで、その父親は士族だったけど苦勞して早死にしたから、母親の女手一つで育てられて貧乏暮しだった。

それでも学問好きな女で、高等小学校を出ただけじゃ飽き足りずに第一高女へ進んで、まだその上、っていうんで津田英学塾の予科まで行った。しかし学費が続かず中退。そん

加藤家の愛犬マップとの写真、加藤さんの写真(左)もお母さんの写真も築地の自宅前で撮ったもの。戦時下にこの愛犬を供出させられたことは子ども時代の忘れられない思い出のひとつ



な学のあるおつかさんが、二十六歳の大年増で魚屋の後妻にはいつて、ぼくたち五人の子を生み育てたってわけなんだ」

加藤家には威勢のいい姑しおまちがいて、この人が河岸で汐待茶屋しおまち(大口の買物客の荷物を一時預かる接待所のようなもの)を経営していた。「気の荒い奉公人を取りしきる男まさりのばあちゃん。酒はいくしね。母はそこへ嫁に來たんだから大変ですよ。たまりかねるとときどき英語の独白で、蔭で毒づくんだってさ(笑)。でもよく辛抱したもんだと思ってね。こんなアンバランスな夫婦が別れもせず、子までなして。何が結びつけていたかと云う

と、それは二人とも芝居や寄席が好きってことと、稽古事が清元ってことで一致してたから。親父は銀座の邦楽好きの旦那衆と『くらま会』っていうのを作ってました。つまり天狗の集りだからくらま会。洒落たもんですよ。これがときどき新橋の見番けんぱん（芸者の事務所）でおさらい会を開いたりする。だから夕飯のあと、親父は酒が弱くて猪口一、二杯で真っ赤になっちゃうんだけど、ちよつとさらおうか、って言うとお袋が三味線弾いてね。昔の下町の女は芸ごととはひと通り仕込まれて、清元の三味線が弾けたんですね。また、ぼくの姉が若柳流の踊りを習ってましたから、たまに両親が地方になつて座敷でさらうこともある。そんなときはばあちゃんも機嫌よく見物にまわつて……魚屋宗五郎のせりふじゃないが、ほんと、楽しかったね」

姉さんの友だちが船宿の網金あみかねの粹な娘、すみちゃん。二人で『落人』（おかる勘平道行）を踊ったりした。

「すみちゃんがおかるのほう。ぼくより四つ上でしたけど、あこがれましたねえ。へその悪縁か白猿はくえんによう似た顔の錦絵の……なんて文句もすつかりぼくの頭に刻み込まれてるから、本物の芝居を観たときにスツとわかる。十五代目羽左衛門の勘平が、六代目菊五郎のおかるに、へよう似た顔の錦絵の……って指さしてこなされると、フツと照れ笑する羽左衛門の口元なんてものは、水も滴たる色気があった。比べちゃ悪いが、姉やすみちゃんとは大違い（笑）。まあ前だけど」

芝居に行く日には、早退届けを書いてもらって学校を早引けをする。

「叔父さん叔母さんを片っ端から病気にして。だんだん足りなくなってきたら、受持ちの先生が粹な人で、今度はうちの叔父さんを貸そうか、って（笑）」

加藤さんは中学生となり、戦争はますます激しさを増してきたが、築地（当時は小田原

町」という土地への愛着が強く、疎開はしなかった。

「そのおかげで、十五代目羽左衛門の最後の舞台というのを明治座で観てるんですよ。橘屋は『実盛物語』なんだけど、その前の『義賢最期』からやる。義賢は十二代目仁左衛門。

この人はきれいな女方で橘屋の女房役だけど、義賢みたいな役もやったんだね。幕切れに血まみれになってバターンと仏倒れで死ぬところが妙にインパクトが強くてね。戦後の食糧難から弟子の恨みを買って悲惨な殺され方をした人ですから、そのイメージが重なるんだね。で、『実盛』を観て、二の替りは『権上』ですよ。橘屋の権八、十二代目仁左衛門の小紫。吉原仲之町の満開の桜の下、駕籠の中の権八が夢からさめると、禿が小紫の手紙を持って迎えに来る。まあその派手なきれいさね。それで観てる俺たちは、たとえばカーキ色の薄汚い服でゲートル巻いて鉄兜抱えてジッと客席に座ってる。一瞬戦争中なの

を忘れて、この夢がさめずに続いてもらいたい、と祈ってる。そういう時代でしたからね」

昭和十九年三月九日の下町大空襲に続いて、五月二十五日には爆撃機二百数十機が飛来して、東京の大部分が焼失した。

「夜遅く、B29がまるで鯨の腹がおおいかぶさるように超低空で降りてきて、不気味でしたね。ぼくは中学四年。当時もう寝たきりになったたあの男まさりのばあちゃんだった祖母を布団ごと大八車に移して、上から重い掻巻をかけようとしても、火が風を呼ぶから軽々と舞い上げて飛ばしてしまうのも恐ろしかったです。逃げ場を求めて人波が押し合いへしあいしているうちに、焼夷弾が目の前の上空で炸裂して、歌舞伎座が燃えている。思わず大八車を母にたのんで、ぼくのがれの歌舞伎座の終焉を見届けておこうと駆け出しましたよ。悪夢のような一夜が明けて、うちへ帰ってみると、なんとわが家は焼け残ってて、祖母は荷車の上で亡くなってました」

芝居見物だけを生涯の楽しみにしていた加藤さんの祖母（と言っても、父親の義姉で養母だけれど）が、歌舞伎座と運命を共にしたなんて、まるで『三十三間堂棟木由来』のお柳さんみたいな話だ。

「戦争というのは悲惨でいやな話ばかりですね。うちにマッブという雑種の犬がいたんです。ポインターにちよつと似ていて、背中のブチの模様が、本州と淡路島と四国の配置みたいだった。それで英語に強いお袋がマッブと命名したんだと思う。かなり大きくなつたけど、人なつこくて図体の割に間が抜けて可愛い犬でしたよ。親父はきれい好きだったんで、いつも犬は外に出されてるんだけど、留守だと犬に甘いお袋が中へ上げてしまう。親父の足音がすると、マッブも心得えたもんで、あわてて勝手口から逃げ出すんです。まるで間男（笑）。

うち中みんなで可愛いがつてたマッブなのに、戦争中、犬の供出命令というのが出たん

です。あのころ金属や宝石も供出させて兵器の材料にされたんですが、今度は犬まで取り上げて、その毛皮をはいで兵隊さんの防寒用にしよう、つてわけなんです。驚くでしょう。そんな無慈悲な命令が出されるんですよ、戦争というのは。いついつまでに区役所へ連れて来い、と言われても、誰もつれて行く役を買って出ない。でも命令に背いたら大変なことになる。それで、マッブを一番可愛がつてたお袋が、黙って連れて行きました。帰つてきてもその様子についてひと言もしやべらなかつたし、誰も何にも訊かなかつた。戦争が終つて何年たつても、それ以来、みんなマッブのマの字も口にしなかつた。でもわたしは、ときどき写真を眺めて、ずっと忘れないでいてやろう、と思つてますけどね」

その日、加藤さんが肩からさげてきた黒い布製の袋には、マッブのような黒白の小さな犬のぬいぐるみが下げられていた。（つづく）

生まれては まず思ひ出^{おも}ふ ふるさとに 契^{ちぎ}りし友^{とも}の 深^{ふか}き誠^{まこと}を

(法然上人)

私が浄土に往生したならば、まずは思い出すことであろうよ。故郷である娑婆世界にて、ともに極樂往生に参ろうと約束した同行の深い真実の心を。

参照…伊藤真宏著『なむブックス20 法然上人のお歌』(浄土宗発行)

契りし友の

「お父さん、今度こそ書いてよ」

息子が通う小学校のPTAで年一回文集を出している。保護者全員が原稿を寄せるのであるが、PTAのことは母親にと、毎年母親が書いてきた。しかし、いよいよネタに困ったらしい。お鉢が回ってきたのである。

内容は自由。ただし八月三十一日が閉め切りだから、どうしても夏から秋にかけての話題が書きやすくなる。私はふと、小学生だったころ飼っていた犬のことを思い出し、一気に書き上げた。

——アイツはやんちゃなヤツだった。実家で飼っていた犬、タロウのことだ。アイツが死んだのがいつだったのか、不覚にも記憶が定かでない。五年生の時であつたか、六年生であつたか、ともかく夏休みも過ぎ、秋の彼岸前であつたと思う。その年がどんな暑さであつたか覚えてないが、夏になるとタロウは急激に衰えを見せてきた。その時、アイツはいったい何歳だったのだろう。

私に妹が生まれたのが一年生の時、アイツはもうわが家にいたと思う。妹がかみつかれないかハラハラした記憶があるのだ。

アイツがわが家にもらわれて来たのは生まれて数ヶ月のころ。前に飼っていたクロが死んだあと、しばらくして牛乳屋のおじさんが世話してくれたんだ。

クロの記憶はほとんどない。私にとっての物心のはじまりは、もらわれて来たその日、子犬のタロウをのぞき込んだ時からだと言っている。

妹にじゃれついて妹を泣かしたこと。育てていたヒヨコをくわえて死なせてしまったこと。その時、烈火の如く怒って殴りつけた私になすがままにされていたこと。散歩中、引きずり回されたこと。家出して野良犬とつるんでいたこと。野良犬を従え意気揚々とわが家に戻ってきたこと。夕暮れのなかを一緒に走ったこと。そして、家族の一員であったこと。

タロウの衰えは悲しくて仕方なかった。だから認めたくなかった。まだ残暑が厳しかったある日の夕暮れ、私はタロウを無理矢理散歩に連れ出そうとした。でももう、数メートルも走れない。もちろんジャンプもできない。今にして思えば「もういいだろ、納得したかい、ぼっちゃんよ」という顔をしていたような気がする。私はもうじき来るであろうタロウの死をただ待つしか術のないことを知ったのである。

それから間もなくタロウは死んだ。夏休みも過ぎ、吹き抜ける風に秋の気配を感じる夕暮れ、私は今でもタロウを無理矢理散歩に連れ出したことを思い出す。どうしてだか分からないけれども思い出すのである――。

それは、私にとって本当にほろ苦い思い出なのである。それこそ鞭打つように追い立ててしまった。もしかして、それがタロウの死期を早めたのではないか。そう思うと、思春期にさしかかった私は自分の未熟さ、愚かさのうちひしがれた。あれから三十数年。身勝手かもしれないが、タロウの思い出を綴っているうち、もしかしてタロウは自分の死期を承知しながら私との別れを惜しもうとしたのではないかと思えてきた。「死ぬなんてウソだろ、元気出せよ」という私の思いを受け止めつつ、「こうして毎日散歩したね。でも、もうサヨナラなんだよ、ごめんね」とタロウは私に伝えたかったに違いない、オレは子どもだったがアイツはとつくのとうに大人になっていたんだ、と。

誠とは真実の心であるという。真実とは嘘偽りのないこと、二心のないことだろう。もしかして私は思い出を勝手に美化しているのかも知れない。でも、綴っているうちにひとりでに目が潤んきた。アイツもどこかでオレのことを思い出してくれているのだろうか。

契りし友の深き誠。私の極楽往生が叶った時、そう思い出せる友が何人いるだろうか。たくさんの誠が思い出せる、そういう人生を歩んでいきたい。

江戸を歩く

九品仏から目黒へ

第十回

田園編



森 清鑑

大江戸ウォーカー

碑文谷八幡、円融寺

洗足池前の中原街道を北東に坂を登って少し進むと鎌倉道（環状七号線）にぶつかる。山の尾根にあたるため、すこぶる見晴らしは良い。広くはない道ではあるが周囲は櫟などの古木が林立している。ここを左に曲がって真っ直ぐ行く（上馬方面）。道自体も上がったり、下がったり。やがて清水窪弁財天から登ってきた古道に出くわす。交差する道を右へ折れて下る。真っ直ぐ行けば目黒である。この辺り三合塚と云い、古墳の跡といわれる。三本の分かれ道の左手を取る。すると第六天社（高木神社）がある。江戸時代、農民の信仰が篤く、江戸各地に祀られていたがここも例外ではない。今、小さな境内に文字がかすんだ江戸時代の道標がある。立方体の正面は、碑文谷村仁王尊、目黒、左側は、大森道、右側は二子道、裏側は池上道とある。この道標は、環七の建設工事に伴い、当神社に移転、

保管されることになったもので、おそらく、前述の鎌倉道を右に折れる交差点（宮ヶ丘、南）に在ったと思われる。

この辺りの情景は、江戸名所図会に手に取るように描かれている。左手に碑文谷八幡宮の森。鳥居が二つ見える。現在と同じである。社は迫り上がった森の上にある。八幡様の下

◆高木神社



に、ほんの少し、第六天社の小森が畑中に顔を覗かせている。鳥居を出ると、広々とした田んぼと畑。その中を畦道あぜみちがくねくねと曲がりくねっている。鍬や鋤を手にした農夫、牛が犁かからすを引いている。畦道は中央から枝分かれし、碑文谷法華寺（円融寺）に向かっている。門前に小さな橋が架かっている。法華寺をぐるりと囲んで流れる川が碑文谷の池から端を発し、品川に向かう、立会川の源流である。

碑文谷八幡の鳥居を潜り、右手に神楽堂を見て、石段を登るとコウヤマキの大樹がある。

周囲は櫟、楠、椎の巨木が茂っている。本殿に参拝し、右手に回り込むと碑文谷の地名の由来となった、「碑文石ひもんせき」がある。薄茶色の原石には、読みにくいが大日如来の梵字が刻まれている。石は、呑川の砂岩で、神社の西方を行く鎌倉街道の土中に埋もれていたという。室町時代の作と推定されているが、碑文を彫った石のある里（谷）から碑文谷という地名が生まれた。碑文谷八幡は、江戸時代碑

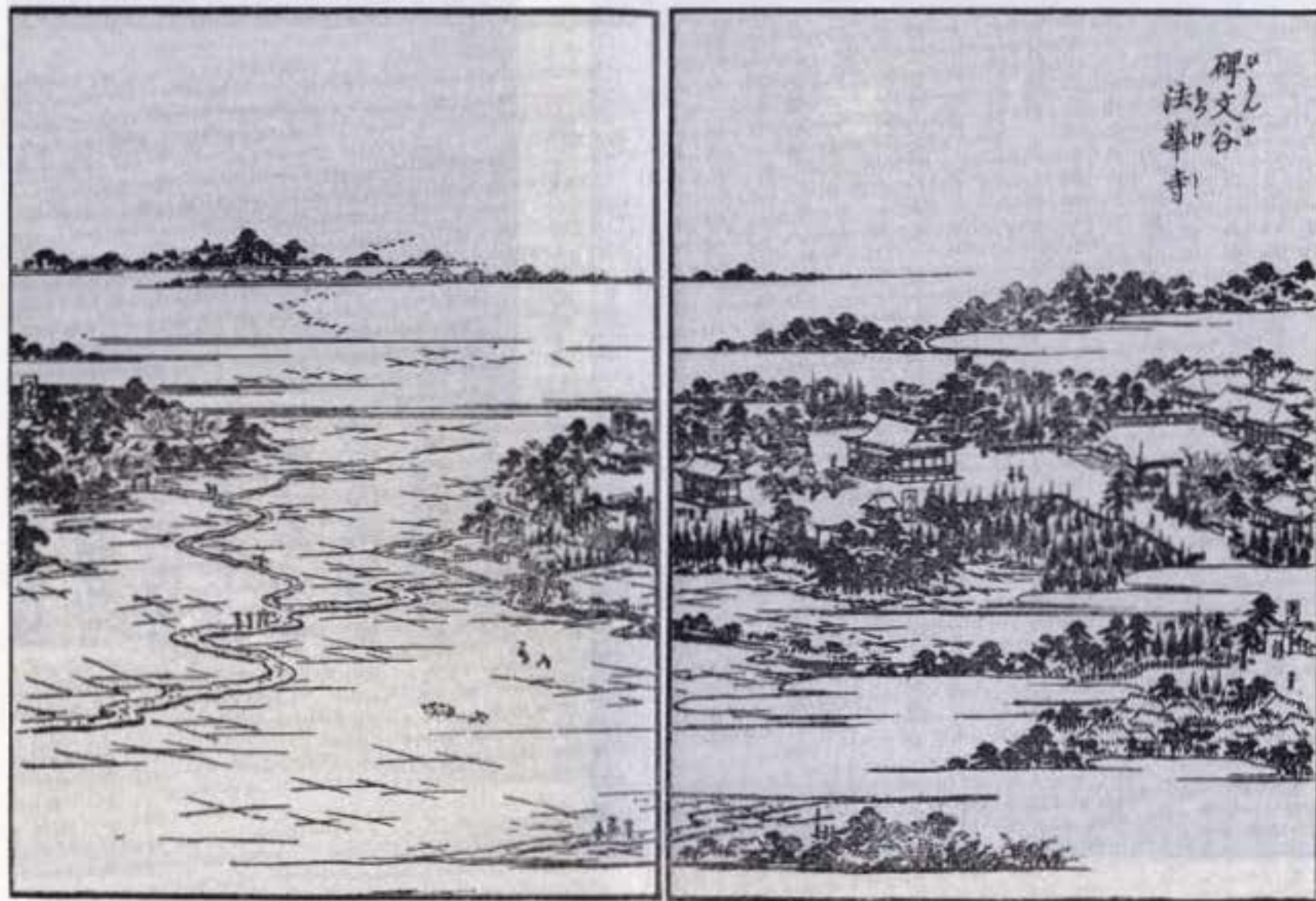
◆江戸時代の道標



文谷村の鎮守である。鎌倉幕府の武将、畠山重忠の守り本尊を祀ったのが起源とされている。碑文谷八幡の鳥居を出て、畑の畦道を通り、名所図会の中央、左に折れれば、円融寺（江戸時代法華寺）である。八幡様と円融寺は、畑を挟んで真向かいの位置にある。立会川源流のせせらぎを渡り、石段を登ると約百メー

トルの参道。両側に、ムク、アカガシ、シラカシが林立。江戸期、「碑文谷の黒仁王さん」で有名な仁王門が控える。間を縫って遠くに、なんとも優美な釈迦堂が見える。その背後に阿弥陀堂、右手方丈。広大な面積である。円融寺の歴史は古い。今から遡ること一一五四年。平安前期の八五三年に開山。比叡山延暦寺の末寺にして天台宗法服寺といった。このような片田舎に慈覚大師が開山したのである。昔の人々の行動範囲の広さには驚かされる。以来四百三十年間。鎌倉時代に入り、日蓮上人が池上で入寂した翌年の一二八三年に弟子の日源上人がこの寺に入った。そして、天台宗から日蓮宗に改宗されたのである。それから室町、江戸時代を通じ碑文谷法華寺として有名を馳せた。室町時代、世田谷城主吉良頼康（浄真寺、鷲草伝説「浄土」2007年7・8月合併号）は、この碑文谷法華寺と袈の東岡寺（東光寺、東横線都立大学駅近く）をこの辺り一帯の地域支配の中心地に据え、

◆江戸名所図会 碑文谷八幡、法華寺の景





◆碑文谷八幡

◆碑文石



寺領を寄進するとともに、百姓を入植させ、立会川、呑川の開発を進めた。こうして十世日端上人の頃には、寺運は頂点に達し、寺領三万坪、坊舎十八、末寺七十五に及んだという。江戸の方々から詣でる人々で大変な賑わいを見せた。ところが「不受不施」（法華經の信者以外からは布施を受けず、また法をほどこさない）派の関東における統率的立場にあった法華寺は、日蓮宗本山の身延山とも対決。身延山を擁護する徳川將軍家は、これを弾圧。元禄十一年（一六九八）、法華寺は取りつぶされ、再び天台宗に改宗され、上野寛永寺の末寺となった。碑文谷の住民のほとんどが檀家であったために、その離散によって、法華寺は衰退したが約百年後には、山門の黒仁王が靈驗あらたかなりとして江戸市民の尊信を集め、宗門とは別に再び賑わうことになった。そして幕末の天保五年（一八三四）現在の円融寺に改称された。（江戸名所図会は、天保七年上梓。その前三十年間の労作である

ため、碑文谷法華寺となっている）。円融寺は、全国方々にあり、天台宗が多いが、臨済宗、真言宗もある。元は円融天皇の勅願寺として九八三年に京都に創建。

江戸時代、碑文谷の黒仁王は、多数の読み本にも引用され、一躍有名になった。昭和四十三年に解体修理が行われ、作者の木札を発見。永禄二年（一五五九）鎌倉の住人、大蔵法師の作と判明した。地元の人達は、半紙に印刷された、左右二対の黒仁王像を家の出入り口の壁に災難、泥棒除けに貼ったものである。我が家では、暮れになると円融寺に赴き、新しい黒仁王像を頂くことを常とした。年の瀬に毎年貼り替えて新年を迎えるのである。江戸時代中頃になると、この黒仁王の門前で七日間断食すると、難病が治ると喧伝され多くの江戸市民が業を行った。仁王門の右手に鐘楼がある。梵鐘は寛永二十年の作で国の重要美術品である。門を潜ると正面に釈迦堂がある。室町時代初期の建造物で東京二十三区

内最古の木造建築、国指定重要文化財である。この入母屋造りが関東大震災や戦禍を逃れて、そっくりそのまま市井に残されているのは奇跡といっても良いくらいだ。とりわけ、独特の美しい曲線を持つ屋根が、ひととき印象に残る。建てた宮大工棟梁の「我が手よし。人見よ。」と刻み込まれた文字が発見されているが、その自信の程が伺^{うかが}われる（昭和二十四年～二十七年の解体修理の際に、本堂一番奥の屋根裏で発見。小さな板切れに墨で書かれていた）。

境内には法華寺時代を忍ばせる歴史遺産が多数ある。釈迦堂に向かって左側に板碑が十三基並んでいる。文保二年（一三一八）～永祿十年（一五六七）の板碑である。板碑は鎌倉、室町時代の主として武士の供養塔。板状で頭部は三角形。板碑は現代の塔婆の原型ともいわれ、形状も似ているが、高さ約一メートル五十センチ、幅四十センチ、厚さ十センチの石碑である。石材は武蔵型（秩父、長瀬

近辺から産出される緑泥片岩）で当寺に菩提を託した坂東武者の祈りが聞こえてくるようである。

その右側に、高さ数メートルに及ぶ、法華寺開祖の日源上人五重石塔。寛永十三年（一六三六）建立。さらに江戸時代の檀家の墓石をまとめた塚。その背後に広い墓地。江戸慶安期から現代に続く檀家の墓もある。



◆円融寺山門

◆仁王門、釈迦堂(仁王門の中央を通して見える)



◆板碑



◆江戸時代の墓石

立会川源流、碑文谷の池

碑文谷の池（学芸大学駅、碑文谷公園）から湧き出た水は南側から溢れ出し、現在の目黒通り、田向公園を突っ切って、円融寺西側の縁をなぞり、門前を流れ、そのまま東に進んだところで清水池に端を発する、北からの湧水と交わる。川はそれから武蔵小山の方向に進み（碑文谷八幡から東に真っ直ぐ伸びる立会川緑道）、そこから蛇行して、ついには、品川鮫洲薩摩藩抱え屋敷、土佐藩山内家下屋敷をなめ、浜川橋（鈴ヶ森処刑者が親類縁者と最後の別れの間。通称汨橋。「浄土」2007年6月号）から江戸湾に入る。その清流は呑川と相まって、江戸有数の浅草海苔漁場を形成した。

碑文谷の池は江戸内有数の湧水池でこんなと湧き出る水は、近辺農地の灌漑用水として重用され、また夏にはホタルが飛び交う、江戸の美しい田園風景を演出していた。鬱蒼

◆碑文谷の池



とした武蔵野の森林。今でも池を囲むクヌギ、エノキ、シラカシの大本にその面影を見ることが出来る。明治期には、入りくんだ池に籠を背にした蝮職人が蛇を捕りに来たそうである。ここは江戸期歴代の將軍鷹狩りの場としても名高い。三代家光も八代吉宗も目黒、目黒不動尊、そして碑文谷の池まで頻繁に鷹狩り（野鴨狩）に來たのである。そういうわけで、現在も鷹番の地名で残る鷹匠の番屋があった（鷹番幼稚園）。昭和二年、東急東横線の開通工事では、学芸大学駅から都立大学駅にかけて、鬱蒼とした竹林を見ることが出来る。江戸時代、目黒のタケノコは、有名（碑文谷八幡社西側の「すずめのお宿」公園に残存）。昭和二十年代の頃には、碑文谷池をぐるりと囲んで川が流れ、蛭が一杯いた。北側から流れ出る水は、品川用水（駒沢通り）に直結していた。池の周囲の木々もまだ、原生林の面影を残しており、「鬱蒼たる森」の感があった。クヌギからしみ出る蜜に群がるカ

ブト虫を沢山採ることができた。池の中央には巖島神社があるが、江戸時代、土地の領主神谷氏が五穀豊穡を願って手厚く保護。ここも神秘的な自然風景が色成していた。

◆式亭三馬の墓



円融寺から目黒不動尊へ

円融寺の東側を二子道が通る（現在の国道二四六号線に通じる）。仁王門前、木立の中を右に行くとこの道にぶつかる。そこに現在は正泉寺がある。浄土宗芝増上寺の末寺である。明治四十四年芝から移転。この寺には、江戸後期、十返舎一九と並び称された、式亭三馬の墓がある。本町二丁目（日本橋室町三丁目）で薬店を経営しながら、その文才は迸るがごとく、多くの滑稽本傑作を残している。庶民の会話を活写した、「浮世風呂」、「浮世床」で名高い。三馬の墓を詣で、その後ろ、墓地の奥まったところに羽倉簡堂の墓がある。幕末の儒者で「海防秘策」を著した。

円融寺の東門も、この二子道に接している。黒門に至る長い参道の両側は、イチヨウ並木。門を出て真っ直ぐ歩くと五差路にぶつかる。正面に法界塚がある。五、六世紀の古墳の跡とか、円融寺の経塚ともいわれている。そこ

に建つ鬼子母神堂も古く、元和二年（一六一六）の建立。地元では「鬼子母神様」として親しまれてきた。江戸時代法華寺を訪れた人達はここも詣でたことであろう。

五差路の左の道を行けば、清水池。鬼子母神堂に沿った中央の古道を選ぶ。この道は直に二手に分かれる。右の道を取る。月光原を突っ切っていくと上馬、野沢から駒沢通りを突っ切って流れてきた品川用水の清流が広々とした、寄合旗本の領地（松井家三千石、二万二千三百坪）の南東を巻くように下る。この土地の北の縁には羅漢寺川が流れている。この二つの川に挟まれた地域が、現在の「林試の森公園」である。明治になり、日本最初の林業試験場。そのために、レバノン杉（ギリシャ時代、真っ直ぐに伸びるこの木を軍船のマストなどに使用。トロイ戦争は、レバノン杉争奪戦であったという見方もある）、中国孔子廟から直接入手した、カイノキ（ランシンボク）、鳥が解毒剤としてその実をつい

ばむユーカリの木（コアラが好むことで有名）といった日本の植生にはない木々が在る。モミジバズカケ、ニワウルシ、ユリノキ（グンバイノキ）、シマサルスベリ、楠、ニセアカシア（ハリエンジュ）などの群生林もある。葉に虫が寄生し、イボのようになるイスノキ、コルクの原料になったアベマキ、青い実が一杯なるスギ科のコウヨウザン、ウスバタイサンボク、ウラジロカシの巨木。沼地に植生するラクウショウの高木群落。ここには枚挙にいとまもないほど、めずらしい木々が織りなす自然がある。

森林公園の中央の道を目黒駅方向に突っ切って進むと出口に面して急な坂道がある。石古坂。左へ下ると、目黒不動尊門前町である。

【参考文献】

「江戸古寺七〇」小山和著、NTT出版

◆カイノキ



前進座特別公演『法然と親鸞』（二〇〇七年七月京都南座で開幕。四カ年に亘り、）で
法然上人を演じた中村梅之助が渾身で臨むこの秋話題の名作舞台。

★前進座劇場開場二十五周年記念◆前進座公演◆



近松門左衛門II作・平田 兼三II補綴

俊寛

鬼界ヶ島の場

竹本連中



「鬼界ヶ島に鬼はなく、
鬼は都にありけるぞや...」
当代随一、梅之助、俊寛の
悲しみの淵にあるものは――

人情一々噺

にん じょう いっ せき ばなし

――子はかすがい



平田 兼三II脚色・小池章太郎II改訂

別れた夫婦の
仲を取り持つ
伴猪之助の
明るい笑顔。
子は鎧
などと申します

村上 豊II絵 制作II松永耕次・楠原厚子

2007年10月17日(水)~31(水)
吉祥寺 前進座劇場

10月	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水
昼	1:00	1:00	1:00	11:00	11:00		1:00	1:00	1:00	1:00	11:00	11:00	1:00	1:00	1:00
夜				4:00	貸切						4:00	4:00			

11月5日(月)・6日(火)
浅草公会堂

11月	5	6
	月	火
昼		1:00
夜	4:00	

★ご観劇料金 8,000円 (浅草公会堂◆2等席5,000円・3等席2,500円/前進座劇場◆ジーンズシート4,000円あり)

★お申し込み 前進座東京営業所 TEL 0422-49-2811

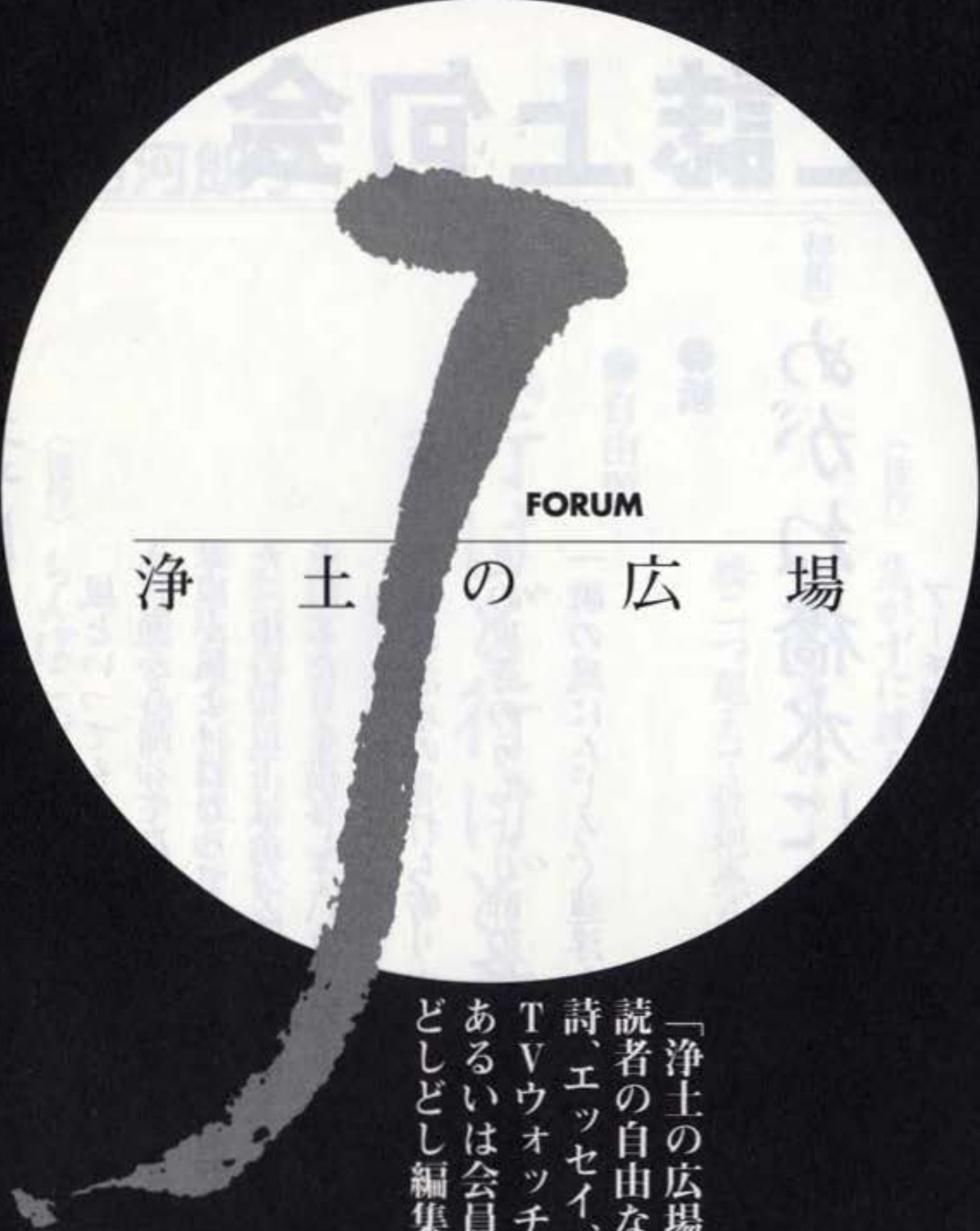
開場25周年記念公演の掉尾は、前進座歌舞伎の代表作『俊寛』。
花道のある455席。大劇場では味わえない臨場感あふれる歌舞伎を
ぜひ吉祥寺・前進座劇場でご堪能下さい。

月刊『浄土』読者割引あります。

定価 8,000円のところ **6,500円**
※ 10月17日~31日 前進座劇場での公演に限り。

お申し込み

前進座 **0422-49-2811**
お電話の際、月刊『浄土』読者の旨、お申し出下さい。



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●風

〔特選〕青葦に舟近づけば風止みぬ

中島富士子

風といってもやわらかいものに違いなからう。漁から帰って舟着き場に近づく。岸边の葦原が風よけになって、舟は静かに着けられた。中の句以下は余分な説明もなく、うまくそのあたりを描写している。

〔佳作〕秋風に流木の骨打ち寄りぬ

市川 河泊

夏の風寺のうちより酢の匂い

山口 信子

一瞬の風にたじろぐ蓮浮き葉

大西 明子

●橋

〔特選〕めがね橋水に映りて夕涼し

石原 新

アーチ橋が二つ連なったものである。水に姿を映すことで眼鏡の形になるのだ。傾く夕日がかつきりとその姿を映している。水は徐

徐に茜色に染まってくる。涼しい風が心地よく頬をなでてくる。

〔佳作〕 急がずに渡る小橋や合歓の花

河合富美枝

陸橋を黒犬のゆく日の盛り

十条 苑子

橋二つ越えて枇杷売り荷を下ろす

増田 信子

●自由題

〔特選〕

蟻行けど行けど産業廃棄物

和田 仁

産業廃棄物は法の網をくぐって、あたりの迷惑も考えず、うずたかく積み上げられる。この句はどういうのか知らないがこう解してよかろう。「行けど行けど」には、人間の業の深さを匂わせているようである。

〔佳作〕 ちんばこの二人駆け出す雲の峰

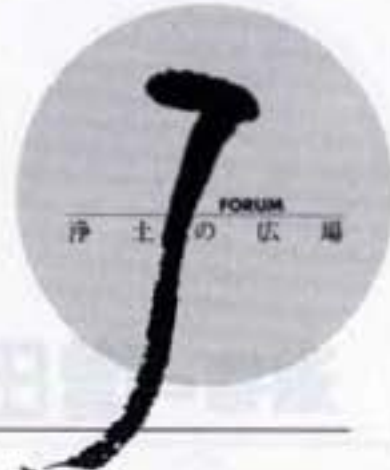
内藤 隼人

紫陽花を咲かせて家の中くらし

池田 伊吹

勝ち目なく握る基石や梅雨じめり

西井 正



黒情自由題

兼題
(季語ではありません)

浄土誌上句会のお知らせ

締切・二〇〇七年十月二十日
発表・『浄土』二〇〇八年一月号
選者・増田河郎子 (『南風』主宰)
応募方法
● いずれの題とも数の制限はありません。
● 特選各1名・佳作各3名
葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。
宛先
〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

風

夏雲や甲斐の風鳴る石切場 河合富美枝
秋風や天草四郎の勇姿立つ 金谷 友江
もう沢山というほど降って暴風過 片桐てい女
烏啼き往きし仏の風通る 飯島 英徳
うたた寝の幼に涼風夢はこぼ 佐藤 雅子
熱風やビル屋上に草揺れて 目黒 裕
流灯の寄り添ふ風の曲がり角 内藤 隼人
扇風機軋みつ走るレトロバス 浜口 佳春

橋

青嵐や橋のたもとの殉難碑 中島富士子
お手つぎの帰りに瀬戸の橋渡る 金谷 友江

落人の青嶺に懸けしかずら橋 片桐てい女
友好の懸け橋となれ虹二重 佐藤 雅子
歩道橋くぐりて夏のバス止まる 柏木 貞華
橋二つ越えて枇杷売り荷を下ろす 増田 信子

自由題

夢つなぐおみくじ結び青葉寺 河合富美枝
棟上の旗なびかせて梅雨晴れ間 佐藤 雅子
蓮池に蓮の初花三回忌 金谷 友江
竹春や地に木洩れ日のきらき揺れ 片桐てい女
病む夫へ野の薫風を吸はせたり 中島富士子
空き部屋に蚯蚓の乾く音のする 濱野 振子
美しく徹のきてゐる俳句かな 青山 亜子
雲の峰今宵名画座閉館す 山王 吾郎
八月や大きな窓は空ばかり 千田 敏郎
座布団に石の乗りたる炎暑かな 目黒 裕
炎天下匂ひを嗅いで入る路地 濱野 唐人
徹くさき闇の見えたる神社かな 油木 掉

さっちゃんね

44

かい

かまちのろう



編集後記

うなだれし案山子の上に天の空 岱潤

昨年福岡で起きた、青年の酒酔い運転で、橋から川に転落し三人のお子さんが亡くなった痛ましい事件の公判が先日行われた。その中で検事は、被害者の母親の手紙を、検事調書として朗読した。何度潜り子どもたちを救おうとしながらも最後は力尽き、長男を断腸の思いで諦め、下の子二人を支えきれなくなっている父親の所に向かおうとした時の心境、そしてその二人も息絶えてしまった時の思い、想像を絶する地獄がそこにあったことだろう。

文章は最後、もし最高刑の二十五年よ

りも一年でも刑が軽かったときは、私が殺しに行きますと締めくくられた。

この母親の気持ちは、痛いほどわかり私も同じ立場なら同じ思いをもつだろうと思えた。町の人々の反応も一様で、みな母親に同感した。

「私が殺しに行きます」

しかし、これは自宅の中で語られる言葉であり、検事調書として検事が公の場で読む言葉ではないと思った。

言葉は一人歩きする。「人を殺す」という言葉が、肯定的に当然の行為として語られることに、大きな危惧を感じた。また検事調書が被害者の感情論で占められるようになったとき、将来の裁判員制

度は恐ろしいものになる思いがした。仏さまはわたし達にどんな時も冷静になることを求めている。
(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十二巻十月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十九年 九月二十日

発行 平成十九年 十月一日

発行人

佐藤良純

編集人

大室了皓

印刷所 株式会社

シーディーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七・四 明照会館内

発行所

法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八)六九四七

FAX 〇三(三五七八)七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓爾(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
舩博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
宮林雄彦(横浜・大光院)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkkan-jodo.info>

連載

教えと法話

行ぎょう此し難なん事じ

この難事を行ず
阿弥陀経

生野善應

亜細亜大学講師
東京高輪・光福寺住職

逃避するが故に、難事生ず。
知と愛と忍を以って行ぜよ。

弥生時代前期には、すでに立派な水田があったようです。万葉集や古事記には、稲に関した歌や神話が載っています。

稲は、ほんらい、亜熱帯の禾本科植物です。高緯度の日本での生産は、品種改良、緻密な世話と忍耐の連続でした。

さらに豊富な日照と潤沢な水量の確保を祈願して、太陽、山、河川、大地の神がみを祭り、また

稲魂を社に勧請して、毎年豊作を祈願します。稲魂を祭る稲荷社は、神道系で約三万八千社、仏教系を加えた社数は膨大です。

日本の稲作は難事を克復した結果です。しかし食生活の変化でしょうか、日本の通貨で稲穂の図柄は五円だけです。

百円銀貨も一時期稲穂でした（昭和三十四〜四十一年）。

法然上人鑽仰会の

本



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円



『差出人は法然さん』
600円

月刊『浄土』
バックナンバー



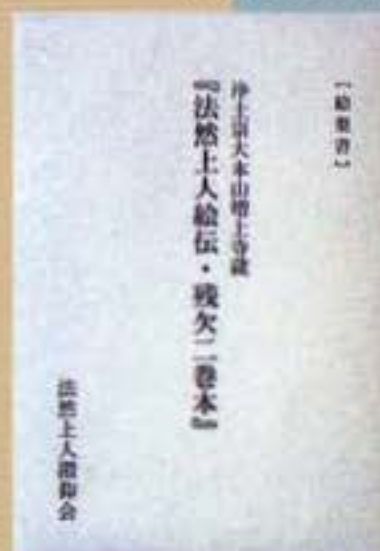
※額装寸法 47 × 59 cm



選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円 (別途梱抱料300円)



『法然上人絵伝絵葉書』
(8枚セット) 800円



委託販売

増補版『浄土への道
法然上人法語抄』
1,000円



『ブッダ
知れば知るほど』
1,000円



※浄土宗大本山増上寺蔵
『法然上人絵伝・残欠二巻本』より

当会発行の書籍、雑誌のお求めは、
当会へお申し込みください。なお、月
刊『浄土』を除き価格に送料は含まれ
ておりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会
電話 / 03-3578-6947
FAX / 03-3578-7036